



君はどこかで僕のこと見てるのかな。

僕は君が居なくなった時からずっと、君の言葉を信じてるよ。

君が僕のところに来た時のこと、今でも鮮明に覚えている。

雪が溶けて、しばらく雨が降り続いた後の暖かい日だったね。

何だかほっぺたが、くすぐったくてムズムズしてたのを覚えてる。そしたら、次第にいい香りがしてきて。

そこに、君が居たんだ。

「こんにちは」

最初は君から声をかけてくれたんだ。

僕に話しかけるヤツなんて滅多に居ないから、返事に困った。

「・・・うん・・・」

僕の小さな返事に君は笑った。甘い良い香りがしたんだ。

「必ずまた会いにきますよ。だから、待っていてくださいね。」

最後に君はこう言い残して行った。

僕は待ってるよ。

君が待てと言うから。

僕には信じるしか出来ないんだ。

君を追うことも出来ないから。

暖かな日差しの中、君は手を伸ばして「風が気持ち良いですね」って元気に笑ってた。

雨の日には「恵の雨ですよ」って微笑む。

ほっぺたが、くすぐったくなって僕もつられて笑ってた。

君はいつでも笑っていたのに、夜だけは違った。

日が落ちると、元気が無くなるように感じていた。

君の元気が無いと、僕はきっと寂しいんだ。誰かが僕に笑いかけるのを見るのは初めてだったから。

力なく項垂れる君の頭に、そっと声を掛けた。

「あの、、、光。見える？」

「・・・はい？」

「空に浮かんでるやつ。」

「・・・星のこと・・・ですか？」

「星？あれは、星っていうの？」

「ええ、とても綺麗な光ですよ。」

「うん。星・・・。すごく綺麗だ。君が笑うとあの光みたいだって思ってたんだ。」

君が笑ってくれるかなって思って言ったんだけど、君はますます顔を伏せてしまった。

でも、悲しかったり苦しかったりするわけじゃ無いって感じたから、君の代わりに僕は笑ったんだ。

「明日、また笑ってお話ししましょうね。今は、明日の為に休ませてください。」

スッと君は目を閉じた。

これが、眠るって事だって初めて知ったんだよ。

それから僕たちは、たくさんたくさん話をした。

たくさんたくさん笑いあった。

君は、僕の知らない事をたくさん教えてくれた。

この世界は、とても広くて水の中で生きる物や木の上で生きる物があるって。

この世界は、とても綺麗で太陽が沈む海って所や一面氷の大地もあるんだって。

君は、風に吹かれて色んなところを旅してきたって言っていたね。

僕は羨ましいと思ったんだ。

ぼくは、いつからここに居るのかも分からないくらい、ずっとずっと一人でここにいるから。

「それで、その大きな木はどうしたの？」

「雨が降る前になって言って、私を鳥に乗せてくれたんです。」

「優しいね。」

「はい。彼が居なかったら、私、ここまで来られなかったんですもの。その鳥さんも・・・・・・・・」

「鳥さんも？」

「すいません、また明日にしましょう。そろそろ・・寝ます。」

「え・・？まだ、太陽はあそこにいるよ？」

「はい。ごめんなさい。少し疲れてしまいました。」

君は、眠る時間が増えていった。

元気に広げて僕のほっぺたをくすぐっていた手は、上げる事が少なくなった。

日に日に、笑顔が小さくなって行って白く薄く力なくなっていく。

「大丈夫かい？」

「はい・・・？大丈夫ですよ。」

「元気がないじゃないか。」

「そう見えますか？それは困りました。こんなに元気ですのに。」

君は白い顔でうっすらと笑った。以前の様な明るい色は無く、まるで消えてしまいそうだった。

「僕に、何か出来る事ない？」

「出来る事ですか？・・・そんなに暗い顔をして・・・どうしました？」

「君が・・・消えてしまいそうで・・・もう会えなくなってしまうようで・・・。」

「それは、死んでしまいそうってことですか？」

「死ぬって・・・そうか。うん。きっとそう。今までずっと、みんな僕の目の前で死んでいってるんだ。僕は、死にいくみんなに何もしてあげられてない。僕の体は、みんなの様に色鮮やかではないけれど、その分いつまでもいつまでもここにいられるくらい丈夫なのに。この丈夫さの少しでもみんなに元気を分けられていたら、僕はずっと一人ぼっちじゃなかったかもしれない。君がみんなのように死んでしまうとするなら、僕はまた一人ぼっちになってしまうんだ。そんなの嫌だから。僕が出来る事、何かない？」

僕は、必死だった。

毎日毎日、ただここに居るだけの僕の世界が君が現れたことで大きな世界に変わっていたんだ。

たった数日でも君が居る事で冷たい雨も風も、笑顔で乗り切れる。

この世界に、色がついていたんだ。

君が居ない日々に戻るのは、嫌なんだ。

「私は死にませんよ。」

くすっと優しくほっぺたをくすぐられた。

「・・・本当に？」

「はい。ただ、少しの間姿を見せる事が出来なくなります。でも、必ずまた会いにきますよ。だから待っていてくださいね。」

「いつ？いつまで待っていればいい？僕は、ここに居るしかできないから。いつまででも待って居られるけど、一人は、、、、寂しいんだ、、。」

僕の声が震えている。こみ上げる何かが、言葉を遮って君とはなれたくないという思いに胸をつぶされそうで痛い。

「星の光が、私に似ているって言ってくれましたね。笑っていてください。」

ふわっと風が吹いた。

僕が君を見たときには、あたりは白くなっていて、君の甘い香りが薄くなっていった。

君が居なくなってから、雨がたくさん降る様になって、暑くて焼けるような日が続いて、世界に色がなくなって、、、

今はとても寒い。

君に出会う前からずっと一人でここに居たけれど、こんなに寂しいのは初めてなんだ。ずっとずっと一人が当たり前だったから、誰かを待つ事も無く、楽しい事も無いけど、寂しい事も無かった。

君は、いつになったら会いにきてくれるんだろう。
僕は、どのくらい待っていれば良いんだろう。

こうやって考えてしまうと、また、苦しくて痛くなる。

でも、夜になれば君の声を思い出せる。
星の光が、僕に笑いかけてくれるんだ。

君の声、君の笑顔、君の香り。

探しに行きたいのに。。。。。
君の様に風に乗ったり、鳥に乗ったりできないから。

君の言葉を信じるしか出来ないから。

「待っているよ。」

星に向かってつぶやく。
どこかで聞こえているのかな。

「寂しいよ。早く会いたい。」

吹き始めた冷たい風に、ただ耐えるしか無かった。

いつしか僕は、目を閉じて何も考えなくなっていた。

鳥が鳴いている。

風が暖かい。

どれくらいたったんだろう。

太陽の光が僕を照らしていた。

僕、眠っていたのかな。

眠った事なんて初めてだ。

でも、この感じ、、、

今日は、君と出会った日に似ている。

「ねえ、目を開けてください。」

君の声・・・？

「約束通り、会いにきました。」

これは、夢？

眠っていると、夢っていうのを見るんだって君は言った。

「君の夢なのかな。」

「？・・・何を言ってるんですか？」

ぼんやりとした世界に、君の笑顔が見えた。

夢じゃない。

君の香りがする。

夢じゃないんだ。

暖かい風のなかで僕のほっぺたがくすぐったい。

「待ってたよ。ずっと。きみを・・・」

僕の世界は、また色づいていく。